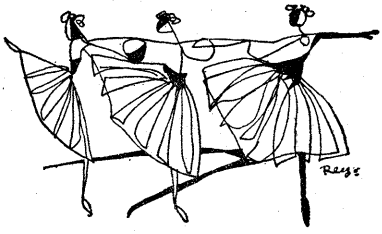

何人かの幼児を受持って共に生活していると、先生はその一人一人についていろいろとのみ込み、子供の方でもその空気に馴れ、何をするのにも気易く、その雰囲気にあったように、お互が安心感をもってすごすことが出来る。先生は先生なりに、子供は子供なりに自然と出来るのである。先生がちょっと場をはずしたり、何か用事が出来てほかのことをしているときや、おやすみをした、というときにお子さんが大きな怪我をしたり、何か事故があることが多いことからもこういうことをしみじみと感じる。

《劇あそび》

おもちゃや

村田　修子

こうして一人の先生のもつ組の感じというものが段々出来てくるが、それは大体その先生らしさをもって成長していく（これは考えるとおそろしいことでもあるが……）

けれどこればかりでなく、四歳・五歳という幼ない子供ではあるが、それぞれのもつ個性の強さとか、集って作り出す気風といおうか気分・傾向は、同じ先生がもってもその年々の組の構成メンバーによってもち味が違う。或る年は大変積極的に出る傾向だったり、おとなしすぎて物足りない感じであったり等々……

（劇あそびを始めるまで）

この劇あそび「おもちゃやさん」をした組は、私が今までに持った組の中で面白いと思った二組の中の一つである。一つは何としてもこちらの思ったこと、云ったことすべてに予想以上に反応してきた組、ところがこれは前者とすこし違って、何をするにもはずかしがる人が多いため「したい」という気持よりも「恥かしい」という気持の方が大変につよく、いざとなるとそのために普段はしないようなことを始めてその場をこわしてしまったりすることがたびたびであった。それぞれ個性がはっきりした人が多く、自由遊びのときの遊びなども平凡でなく発展的なので、面白くたのもしいのだが、人の前で話をしたり、一人で何かするということなどはいやだ、という人が何人もいた、というわけで、劇あそびをすることを四歳児のときから考えていたが、どうしてもまとめることが出来ないという状態であった。

年長組になって一学期の末に、こんどこそみんなで参加して劇あそびをするた

のしさをあじわおうと計画した。

それには先ず子供に一番身近な普段の生活の中から題材をとれば、余りよそゆきの気分にならずに出来るだろうと思って、丁度おたまじゃくしを或る家の池からかんに入れて「先生、はいっ、これ」ともってきてくれたことを中心にして皆で話し合って一つのお話しにまとめた。これから自分のなりたいものをきめるとそろまでいったが、いざ始めるとなると「これになるのはいや」というのがつぎつぎと伝染してとうとう何も出来ないまま夏休みがきてしまった。

第二期がはじまると、運動会がすぎた頃から、極端に恥かしがりであった二、三人の人も何とかなるまでに成長してきた。

そこで劇あそびにもっていってみたが、「劇あそび」というと、今まで大きい組の人のするのを見せてもらった経験などからして、人にみせる、ということを考えるためか、「やりたい」といいながらもはづかしがっていた。けれどその空気は前とはちがった「うれしさ」をもっていることを感じた。

先ずみなでして、「自分も参加した、自分たちでも出来る、たのしい」ということをあじあうということを第一の目的とし、まとまったら何かのときに皆に見て頂く予定をして大部分の用意をこちらでした。

（題材としたもの）

クリスマスやお正月をひかえて、普段の自由表現や模倣あそびなどのときしている「びっくり箱」などからヒントを得て、おもちゃの中から材料をさがした。考えられるおもちゃの中で、音に合わせて動けるもの、動作や表現のしやすいものとして、凧・自動車・お人形・汽車・羽根・こまを選んだ。

（話しのすじ）

おもちゃやの店で、夜中におもちゃたちが集ってびっくり箱をしながらたのしく遊んでいる。遊んでいるうちに夜があけ、お店のおじさんとおばさんが出てくる。おもちゃはいそいでもとの棚にかえる。おじさんとおばさんは、おもちゃを順々にうごかしてみる。そしてこわれたおもちゃは奥にしまってくる。よいおもちゃはお店の棚にならべる。おわりにこわれたおもちゃはなおって出てきてお店のおもちゃとみんなでいっしょに遊ぶ。

話しの構成は、「おもちゃが出てきて動き、半分はよく動き半分はこわれる」ということのくりかえしとした。

（配役など）

おじさんとおばさんになる人については皆で「誰がしたらよいか」というようにしてきめてみた。ところが面白いことに、おじさんになった人はそういう役になってもまあリードしていける人であったが、おばさんになった人は「おばさん」という名称からお子さんがそう感じたのか、普段余り口をきかないおとなしすぎるくらいの人にきまった。

あとのおもちゃは、それぞ自分たちがなりたいものになった。このおもちゃたちは、半数はよいおもちゃになるわけなので、子供たちの発案からそれはそのおもちゃのグループの中でお互に話し合って交代にするようにした。

この交代してすることがとても面白か

ったらしく「今日はぼく」というように自分でよく覚えていて、それぞれが駄目になり方を考えていた。この交代することや考えることが変化をつけたのか、することをとても喜んでいた。

おじさんとおばさんの会話は、二人が交互に新しいおもちゃの名前を出していくように考えていたが、それになる人から考えて、おじさんはいつも「何をしてみょう」とし、おばさんはそれをうけて「……しましょう」というようにかえて、それぞれが同じ内容をもった言葉をくりかえすことにした。

（うごき……主におもちゃについて）

動きは普段しているものの中から、お人形、汽車などの自由表現をとりあげた。その他も題材を与え、先生の方は大体の動きを予想して適当に拍子、メロディーをつけた、動きやすいフレーズをもつ音楽をもっていて、自由に表現した中からとりあげた。たとえば凧は、二人はあげる人になり、凧になった人はすきなようすをして空にあがっているところをとりあげ、羽根は、四拍子の音楽で、おじさんとおばさんがつき、そのあいだを羽根は三呼間かかってまわりながら反対側にいき一拍やすむ、というようになったのをとりあげた。こまは子供が考えたのはただその場をくるくるまわるだけだったので、危険などを考えて、両脚とびとか、左右に動いたりひとまわりする、というようにヒントを与え、そこから更に発展的に考えたものをとりあげた。

動作している途中で半数が駄目になるが、それは同じ曲を高音部でひくことによって区別し、高い音になったら半数は、それぞれの考えた駄目になり方で動作をやめ、よいものはそのまま動作をつづけた。

ふりかえってみると、言葉をいう人が少数であるが、すじが繰返しで言葉も同じようになっているために、誰でもがすぐにかわっておじさんやおばさんになることが出来た。おもちゃの動作もそれぞれの考えなので、これも誰もがすぐに出来た。そのため交代している場合に、思いがけない人が予想外のことをするときがあった。

音楽に合わせてすることが大部分なので、「劇あそび」と、とり出しているほどのものではないが、みなが気軽にすることが出来たので、「みんなでまとまりのあるものをする」という一つの目的だけは達することが出来たようにおもう。

（お茶の水大付属幼稚園）

新　刊

日本女子大学教授　愛育研究所食養部長

医学博士　武藤静子著

栄養学の基礎から給食まで

A5判・208頁

定価250円 〒24

株式会社　フレーベル館